

P57 日本行動分析学会第21回大会 発表論文集
2003年8月4日～5日 岡山大学文学部

スキナーの言語行動論と時枝の言語過程説

Skinner's theory of verbal behavior and Tokieda's language process theory

佐藤方哉

Masaya SATO
帝京大学文学部

Faculty of Letters, Teikyo University

I. 目的

国語学者である時枝誠記(1900-1967)の提唱した言語過程説とよばれる言語観を、スキナーの言語行動論と関連づけて考察する。

II. 言語過程説の要点

(1) 言語は、思想の表現でありまた理解である。思想の表現過程および理解過程そのものが言語である。

(2) 言語は、音声(発音行為)および文字(記載行為)を媒介とする表現行為であり、また、音(聴取行為)および文字(読字行為)を媒介とする理解行為である。

(3) 言語は、人間の行為、活動、生活の一部である。言語を行為する主体を言語主体と名づけるならば、言語は、言語主体の実践的行為、活動としてのみ成立する。

(4) 言語の成立条件は、主体(話し手)、場面(聞き手その他)、素材(語られるもの)の三つである。

(5) 言語は、「話すこと」「書くこと」「聞くこと」「読むこと」の四つの形態のいずれかにおいて成立する。したがって、表現には「話し方」「書き方」、理解には「聞き方」「読み方」という技術が必要である。

(6) 言語を行為し実践する立場を、主体的立場といい、言語を観察し研究する立場を、観察的立場という。言語を研究するという事は、言語を行為し実践する主体的立場を観察することである。

(7) 語には、概念化する過程を経て表現される(詞)と、概念化する過程を経ずに言語主体の立場を直接に表現する(辞)の二種類がある。詞に属するものは、名詞、動詞、形容詞、連体詞、副詞などであり、辞に属するものは、助詞、助動詞、感動詞、接続詞、陳述副詞などである。

(8) 言語過程説を図示したものが図1である。

III. スキナー理論と時枝理論

時枝は、言語を記号の体系とみなすソシユールをはじめ多くの言語学者、国語学者の見解を言語構成観と名づけそれを退けて、言語を行為の一つとみなす見解を言語過程観と名づけ、それに基づく言語過程説を提唱した(時枝, 1941)。時枝の見解は、基本的にはスキナーの見解と相通じるものがあり、画期的な言語理論とみられるスキナーに先行していることからも注目し値する。

時枝は、もちろんスキナーについてはまったく何の知識もなかったであろうから、オペラント条件づけや、行動随伴性といった概念を取り入れていないのは当然で、言語の習得は連合によるものと考えていたようであるが、もしも生前にスキナーの見解を知ることができたならば、大いに共鳴し自己の理論に取り入れたであろう。

そう思われる理由の一つとして、時枝の(辞)

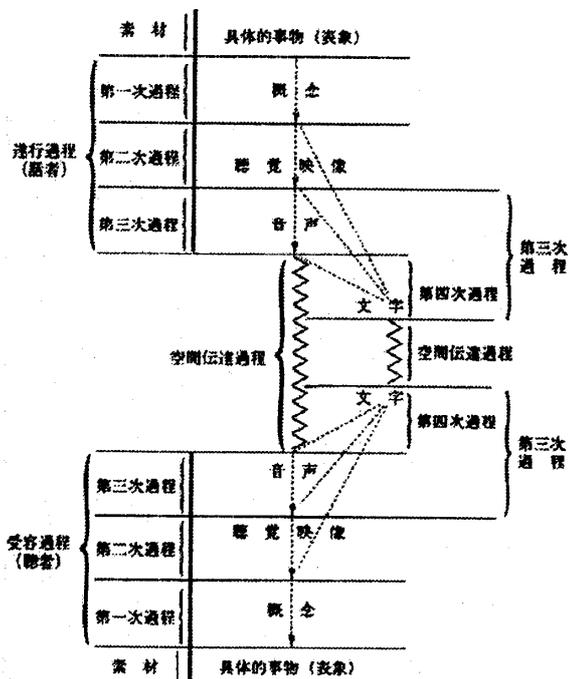


図1 言語過程説の図式

の概念とスキナーの〈オートクリティック〉の概念とは、ある意味できわめて類似しているからである。時枝の否定的分析などは、まったくスキナーのそれと同じといつてよい。

時枝の〈概念〉という概念は曖昧であるとの批判があり、筆者も同感であるが、スキナーの理論はそれを明確化する助けとなる。

時枝の言語過程説をスキナーの言語行動論によってさらに洗練させることができるばかりではなく、スキナーの言語行動論も時枝の言語過程説によってさらに洗練させることができよう。

たとえば、時枝の日本語の敬語論はきわめて優れたものであって、スキナーの多重因果の概念をより具体的に明らかにするためには非常に役立つのではなかろうか。

引用文献

時枝誠記 (1941). 国語学原論. 東京: 岩波書店.